風月楼一枝三作目の洒落本

――『南竅釣』翻刻と紹介――

小林　勇

風月堂一枝の名は、よほど洒落本に関心のある向きでなければ、御存じのないところであろう。その手になる稿本の吉原物洒落本『傾城買杓子規』[1]は比較的早く、旧蔵者尾崎久弥氏によって昭和五年刊行の『洒落本集成』第三巻に収載され、世に知られるようになった。その後半世紀以上を経て、昭和六十年刊『洒落本大成』第二十三巻には同書が、伏せ字等のない完全な状態で再び翻刻されたが、同巻にはそれまで未紹介であった同人の新宿物稿本『甲駅彫青とかめ』が、大東急記念文庫蔵本によって初めて翻刻された。一作のみと思われてきた一枝の作品が別にあったことが知られたのであるが、紹介の順から言って三作目に当たる品川物の稿本『南竅釣』が存在するので、ここに翻刻、紹介したい。

これまでに紹介された二作品は、「皆享和第四歳甲子孟春」（『傾城買杓子規』）、「享和四年早春の夜」（『甲駅彫青とかめ』）とする年誌を序末に記していたが、本書もまた序末に「享和四年孟春」の年誌を持つ。もし出版が意図されていたならば、これら三作品は享和四年春に一斉に店頭に並んでいたかもしれない。しかし言うまでもなくこの出版は実現しなかった。『大成』二十三巻刊行の二年後に近藤豊勝氏が指摘された如く、[2]享和二年二月に改めて出版取締が布達され、「遊興放埒之躰」を描く洒落本は徹底的な取締の対象となったからである。

尾崎氏は先の『集成』の「解題」で、「家蔵本の稿本洒落本のうち、准刊本と認めていいと思ふ、則ち佳作の方のものである。稿本には、由來つまらないのが多いからである」と述べておられるが、右の事情に照らせば、洒落本研究の大先達の感想はやはり正確であったと言えようか。一枝のこれら作品が刊行されなかったのは、素人作者の習作で刊行を見る水準に達していないからという以前に、洒落本を刊行することなど思いもよらない政治状況であったからというべきであろう。

右のようにいうのは、無論一枝の洒落本を高く評価すべきであるということではない。一九や三馬など職業作家の作品に比するならば、構想も文章も及ばないであろう。しかし素人作者の作としてみれば、一定の出来栄えを示しているものと思われる。刊行された作品であっても、随分稚拙な作品もある。馬琴によれば

抑件の洒落本は半紙を二ツ裁にして一巻の張数三十頁許多きも四十頁に過きす筆工は仮名のみなれは傍訓(フケカナ)の煩しき事もなく画は略画にて簡端に一頁あるもありなきもありその板一枚の刊刻銀弐三匁にて成就しぬるを唐本標紙といふ土器色なるを切つけにしたれは製本も極めて易かりされは本銭(モトテ)を多くせすして全本一冊の価銀壱匁五分也[3]

ということであるが、稿本を自筆で用意すれば傭書の費も不要で、素人作者としては入銀本を刊行しやすいジャンルであろう。洒落本の場合、刊行されたか否かは作品の巧拙と必ずしも連動しないと考えた方が良いと思われる。尾崎氏の評は、『傾城買杓子規』一作品のみしか知られていない段階でなされたものであるが、同じ時期を示す年誌を持つ作品が他に少なくとも二点存在し、それらが同時並行的に、乃至短期間に次々と執筆されたものであるとすれば、並の素人作者以上の力量を認めて良いのではなかろうか。執筆開始の時期と出版取締令再布達の前後関係

は分からないが、刊行の不可能を知りつつも作品として完成はさせておきたかった、「作者」としての執心が感じられる。その何人たるかを知る手がかりが今日においても全く得られないのは惜しまれるところである。

さて今回紹介する『南竅釣』について、その全斑は翻刻本文に就いて御覧いただきたいが、概略を述べておけば、全体が二部構成になっており、前半は廻し座敷にいる「南交」という利いた風の地回り客と妓女「おゆふ」の、後半はその「おゆふ」の部屋にいる「常」という息子株と「おゆふ」の関係をそれぞれ描いている。そして直接登場はしないが、もう一人別に廻しの坊主客がいることが示されており、この「女郎ひとりに客三人」の構図は、そのまま式亭三馬の『石場妓談辰巳婦言』（寛政十年）に倣ったものであろう。その故もあってか、全体に室内における客と遊女の会話等の描写に終始しており、品川らしさは「見通し」「九曜」「お部屋」といった単語に見られる程度にとどまっているが、それでも素人作者としては務めたりというべきではないであろうか。地回り客「南交」の名は、『傾城買杓子規』にも同音の「南幸」という人物が登場するが、それよりも品川物洒落本の第一作が『南江駅話』（明和七年）であるように、「南江」が品川の別名であるところから来たものであろう。品川物の先行作にも往々見られる名である。

一枝自身の他の二作品と本作を併せて見ると、ある程度の共通点が見えてくるようである。先ず全体を二部構成とし、それぞれに角書きを持った標題を付けていることである。『彫青とかめ』の異様に見える、全体の半分ほどを自序とする構成も、その自序の部分に標題が与えられていることからすると、随分旧聞に属する「光大寺事件」への配慮[4]故の不体裁というよりは、旧稿を差し替えた形にする趣向でこの構成に新機軸を出そうとしたものであったのではなかろうか（それが成功しているかどうかは別としても）。その『彫青とかめ』の中で一枝は登場人物に「洒落本といふものは小鍋立にもいった通り筋のきまったやうなもんで……何べん書てもまだもつきねへのは手事でもありやせふか」といわせているが、これを当の『青楼小鍋立』（享和二年）の「アイサ唐も倭も昔も今もかはら

ぬものは人情(にんじゃう)だからこればかりやァなんべんかいてもふるくもなりやせんのさ」とする発言と比較すると、作者の興味の所在も自ずから明らかになる。即ち一枝の作品はいずれも客や遊女の手管に全体としての興味の中心がおかれている。それが全体的には末期本的雰囲気を漂わせながらも、同時代の泣本的作品とは一線を画した、客と遊女の駆け引きを主とした旧来の洒落本色を作品に与えているのであろう。尾崎氏が『傾城買杓子規』を称揚されたのも、おそらくはそうした点を評価されたものではなかったか。

『南竅釣』に戻って、本書にも口絵があるが、画者「文虹」も全く未詳の人物である。『傾城買杓子規』の口絵には「一枝自画自題」とあり(『彫青とかめ』の挿絵は無署名)、相応の画技を見せているが、自画のものにはそう書いているところからすれば、やはり別人であろう。ただし職業絵師などではなく、絵心のある友人といったようなところであろうか。一枝の作品は、重ねての禁令により新作の洒落本の読めなくなったそうした友人たちにでも回覧されたものかもしれない。本書の蔵書印の中には貸本屋印と思われるものもあり、刊行はされなかったものの、密かに読者を得てもいたのであろう。また本書の最後はいかにも後編を要求するような書き方であり、事実最終丁裏にはその予告まであるが、『傾城買杓子規』と同様、後編まで書き継がれたかどうかは分からない。ただそれとは別に、吉原物、新宿物、品川物の作品がそれぞれ一作ずつある以上、深川物も或いはあったかもしれないことが期待される。どこかに眠っていないものであろうか。ともあれ二百年以上の時は経たが、ここに一枝の三作目の洒落本を公にすることが出来た。手向けともなれば幸い、「余計なことをしやァがって」といわれればまた瞑するのみである。

最後に書誌的なことを記しておく。

○書型　小本一冊。稿本。

○表紙　小豆色布目。一四・五糎×一〇・六糎。これが原装か否かは不明。
○題簽　左肩に九・四糎×二・三糎の白紙を貼付。
○構成　自叙二丁、口絵半丁、目録半丁、本文二十六丁、以上、全二十九丁。
○自叙題　「南窾釣自叙」。
○自叙末に「享和四年孟春書於風月楼」。
○内題　「南窾釣」。
○柱記、丁付ともになし。
○著者　内題次行に「風月楼一枝戯著」。
○匡郭　一〇・八糎×八・〇糎。
○口絵　三丁目表。「文虹画」。
○尾題　「南穴釣畢」。
○予告　最終丁裏に「篇女郎蜘蛛／出来／篇中の文字を／其まゝに題す」。
○自叙は半丁六行、本文は半丁八行。
○蔵書印　「辰」（黒印）（見返し）、「万弥」（黒印）「骨董舎」「吉見文庫」「大笑寺什」（朱印）（一丁表）、「得上」（朱印）（最終丁表）、「万弥」（黒印）「骨董／古雑籍／珍書舗／咸亨堂」（朱印）（最終丁裏）。

翻刻に当たっては、なるべく原本の通りとしたが、二行割書の部分は小字で読みづらくなるため、〔　〕で括って本文と同じ大きさとした。カタカナは科白を受ける「ト」及び長音を示す場合のみ小字とした。単純な誤記と思われる箇所にも「ママ」符号は付していない。原本に丁付けがないため、通しの丁数を算用数字で記し、各丁表裏

の丁移りの箇所を示した。自叙には、冒頭部分のみ、白抜き点の句点があるが、白丸点をもって代えた。

なお、本文中には、今日の人権意識に照らして明らかに不適当な、封建的身分差別を表す表現が見られるが、原本の歴史的、資料的性格に鑑みてそのままに翻字した。諒とせられたい。

（1）『洒落本大成』では、題簽の剥落跡に墨書された『傾城買杓子木』を書名として採用しているが、これが本来あった外題を写したものかどうかは不明である。拙稿では、自叙題、内題、尾題に一貫して用いられている『傾城買杓子規』を書名とした。なお「稿本」として話を進める以上、同じく稿本とされる同書と拙稿の翻刻底本とで筆跡を比較する作業が是非とも必要であるが、匆忽の間、未だそれを行えていないことをお詫びしておく。

（2）「享和二年の出版取締りと洒落本」（『国語と国文学』第六十四巻第九号。『江戸遊女語論集』所収）。

（3）『近世物之本江戸作者部類』「洒落本并中本作者部」「三馬　一九」の項。引用は八木書店刊の自筆本の影印による。

（4）注（2）近藤氏論文。

南竅釣自叙

松花堂の筆勢は蚯蚓の芳餌にして。千陰の流千倉の仮名釘。おれを曲たるかしくの鉤あり。テグスいらずに手で釣る糸筋。羽もあからぬに浮れ来て義理と情の天鈰に」（1オ）かゝり。おもき錘の吾身を忘れて万事もそらに無心の一釣竿。女郎釣師のごとく又獲に似たり。故に愚鹵な客人生辰を十九日かと問れ潑摺の婆ゝ蛍きり替の年季を三年物と答ふ頃日友人某風雨間の」（1ウ）日和を偸海中ならぬ閨中に掉さす可愛がらるゝ事恰も魚と水とのごとし渭浜の昔はいざしらず三股の貞女今何在こゝにおいてか毒魚の西施を恐れて異見の范蠡なきにしもあらず然りと」（2オ）いへども釣するを見る者は釣するよりも尚白癡ならずやと手前勝手の岡目八目畠中の不佞も畚を提てなりとお供せん事を庶幾而已と直に友人の世界を綴る事しかり

享和四年孟春書二於風月楼一」（2ウ）

［口絵］（3オ）

目録

あばずれの
廻し床には
宵の間の木枯
地まわり　南交
めしもり　おゆふ

しつほりの
閨中には
夜半の時雨
遊子　常
遊女　おゆふ

（3ウ）

南窾釣

風月楼一枝戯著

あばずれの
廻し床には
宵の間の木枯
地まわり　南交
めしもり　おゆふ

南極地に入る事三十六度南国日本橋を去る事三里に足らず星をもつて大小を別ち六夜の客に棚機をためす」（4オ）俯して二階の天文を観るに女郎光武にあらねども客星の釣師厳子陵のごとく馬おりのお国は金ぐつわと尊るいさゝか王良星に似たり天王野暮からずして居流しの神輿を居地廻おとなしからずして妙国寺の力士を副丑かとおもふ不動をおささきの不孝子は煩悩の狗雪の肌にまよひそめ」（4ウ）大師の利生も未練のうしろ厄を除たまふ事能わず御

殿山の盛りは若盛の誤にして海晏寺の夕栄は夕やけ酒の咎なりけり花も紅葉も見れば一時あすありとおもふ心のあだ桜天に不測の風雲あり突出されたる早手風たとひ猟師町に伏義氏ありとも粋な目からも見へがたかるべしきのふ」（5オ）の皿は今日の荒朝に白金の長者といわるゝとも夕に赤羽根の駕篭舁とやならん旅立よしの初買より暦めいたる南門の細見をふところにして長き廊下を土ふまぬ道中かとおもひ廻しの小坐しきを小やすみの立場かと休らふ寒の師走も赤日の六月も汗は出る〳〵小糠はくもるあひの盥は湯が」（5ウ）さめるといひしは烟華を旅にたとへしならん顔色を粧ふして枕にする手をあきなふとも形を垢ふして足を売雲助にも旅路の生業はかわらざるべし小蟹のふるまひと口ずさみありし衣通姫の気たかきにあらず九太夫がことばを今こゝに福といわるゝ霄のほど鐘は目黒歟愛宕下か楼はいづれかしらねども」（6オ）〔ゆへあってしるさず〕廻し坐敷の燈のかげ〔巣をかけにくる〕女郎蜘蛛おゆふ〔はしか後とはいひながらうすきかみをひつつめのしまだにゆひもつともすがほのおはぐろばかりふところからかた手をいだしいまてうづにいつて来たといふみへにてしやがみながら〕さめぎわのせへかいつそぞく〳〵するよ〳〵酒をのんだりのまんだりぬしやァもふいやなら勝手にしないましわっちが手ぎわはこふざいます見のがしておくんなんしト〔あをつきりにつぐのをみて〕客南交」（6ウ）色気のあるおもいれだから袖の梅といゝてへ所だのふゆふ〔わらひながら〕客人が道中しないますからおいらん気どりにならふかねへそふいわれるとうれしいやつさおかしいねへこふいさみに酒がのまれねへじやァよしわらいやぜんせいおことわりさそれだからぬしが禁酒しないますととんと」（7オ）他人のやうだよ南遠くのおやざとより禁酒の他人がよからふゆふわるいしやれだね此又きれいといふなァ人はづれだねへ南因果の内よ因果といへばこふ又かわいがられるもなんのかむくひだらふのふゆふヲヤちっと部やを見まつて来るとひらってへおいやみだね南ひらってへかまる」（7ウ）まつちいかいやみぎんざんこんな口舌をはじめるとアレちう〳〵なきをしてあたりとなりで笑うだらふからだまつてへいってねんねはどふだへゆふわらってもいゝわなへいる事ァいやさ〳〵女郎買たり買んだりぬしのやうにひさし

ぶりの生酔にぶつつかつてぶたれでもしちやァそんだァな南おきやァがれ」（8オ）なべしなさんの番所から黒ちりじたての棒づきが出やァしねへかゆふひさしいしやれだね口ひれへこつたがわつちが客人に勤番ものなしさそんなにからみないますからおめへさんのそばへへいるなァどふもこわいものを南こわいといふふてうはお関所からこつちへは通らねへはづだが新橋の出番にでも」（8ウ）聞てみりやァいゝゆふほんに客のとりよふをちつとしつけておくんなんし深川ばかりでもなく此土地でも丸びてへをかわいがりやァ清十郎ぐれへな色男もあつてね恋のいの字をきんしでぬふてぐれへはしやれやしたからびいどろ細工のよふざいますがわたにくるまぬばかり大事にして床なきも」（9オ）しておいたならば物めへのなきもしやすめへけれどうまれもつて人の機嫌をとる事が不得手さひよんなつとめにひよんなおうまれだからなに事もぐりはまになるとおもひなんしそんならおゝせの通りあつためておくんなんすかへト〔よぎへはいる〕南ヲヤごふせへとつめてへがまだつめてへものがある」（9ウ）とよゆふなんざいませふね南南さんのつかう銭金とおゆふさんの心いきだとさゆふばからしいねへ此よにあばずれになつてもぬしの工めんほどならまだたのもしいほうかねへ南そふよわつちが中車といふもんだからあじな心に信濃やのお娘とみへるぜたのもしいといふなァそふいふ」（10オ）こつちやァねへまだ〳〵おかみさんにやァおぼつかねへわへゆふおぼつかねへはづさ女郎のしけでもしはしまいしどふして物ずきの性わるに番がされるものかな南めんよふ色男といふものは情のねへものだがマア聞ねへ南さんといふ色男がね此ほどさる所へあがつた所がまだ八千八声のせいちう」（10ウ）あかいもふのが紅ながしとしやれた時ぶんだからそのはなしをしやしたらの其女郎がよにしみ〳〵と異見さ女郎買も毒だほどに当ぶんはつゝしみなんツサまして酒はおよしなんしとむかふでつとめを出してくれていやみなしに一ばん酒のばんまでして美濃とあふみのねものがたり」（11オ）なざァ近ごろ書ぬきの大われへじやァねへかゆふわらひごつちやァありません真実な事さそふいふ事もありませふよ其女郎衆がね十二になる子をもつておまんまや仕事のせわまでしなんした夢をみやしたァな南いゝてうせへぼうにするぜき

ついなまぎゝのいきすぎだね一枝にでも」（11ウ）聞たのかそふいふ女郎だつてあるめへもんでもねへわなまだ気さんじなはなしもあるがそふいつてあるきなんしこけが役はれへになりやァしめへしといふだらふから南の海へさらりつと[ゆふ]紙へつゝんでへい〳〵かねしやれをすてるもげぢ〳〵のよふだねどつちがはぐらかされるかしれないよ其さきやなあに」（12オ）松沢あたりへいくのが大事といけんの文が来やしたとさなんと見通ふしでざいませふが[南]見通ふしだか下ざしきだかァしらねへがそりやァ色身をつくるむすこさんじやァなし聞かれてもはづかしくもおもわねへがきゝたゞす心いきなら手めへもまじめによぶ気だらふが客に唐人がありやァ女郎にも化ものが」（12ウ）あつて手づまじやァねへが長さきもあらふし大坂下りもあらふこつたが手めへのうまれはお江戸のまんなかおしい事にすがた見せんべいがむかふうらで兄貴の三太郎はよい〳〵をわづらつて出入が出来ねへから此春のきりけへからじめへかせぎになつたことかたゞしやァみづからはゆかりたゞしき浪」（13オ）人ものゝむすめにて候とかなんとかもふはなしてもいゝじぶんじやァねへか証文の出しおくれならふせうしてやらふよ[ゆふ]ヲヤ〳〵こんやァでへぶ理におちるはなしになつたねへぬしのいひないます通り京三がいからひなたつくさいかほをさらすのもたかくはいわれぬ事」（13ウ）越後上州上総相模をおしなめて木もんのすそもようがぬけないのも少〳〵はありもしますがねそりやァお公家さんのおとしだねにした所がめしもり奉公すりやァ日雇取の娘だとつてからがおんなじほうべいひつけう穢多こじきでねへからひとつよぎにねないましても罰があたらねへ」（14オ）といふものにげかくれして此地獄へおちりやァなをさらそふでなくつても親兄弟のために見はなされるくれへだからどふで親ざとに気のきいたこたァあるめへじやァねへかへ聞なんして恋気がさめりやァなんぼ諸わけ承知でいないますぬしでもあいそがつきよふかおもしろくありなんす」（14ウ）めへからと[南]しんぞうきどりでいるもおかしいの[ゆふ]かわいそふにまだ[南]そふよ四十にやァなるめへす[ゆふ]おかしいのさはしかの時は杖にすがつてあがりおりしやしたよ[南]そんなら三分と五分のおやくにもたゝねへこつたから手めへのほうのこたァむりにきかふでもねへがかゝァのある

身」（15オ）すがらなにかの事もずぶ承知でよぶ心にやァゆふほれたといふ土でへがすわって居ますよそこいらではとしまの根性さ大がいさつしてもみないましないかに心が心で自いうになるとってしらずにほれていながらおかみさんがれつきとあるそんならそふかすゑのつまらぬ色事だ」（15ウ）ものといっておもひきられるもんかへかなしい事にやァ金づくでなければしんじつな所もわからねへ世の中だから気ばかもんでいやさあな南なに気がもめるもめたら下へたのんで火のしをあてやなあんまりそふでもあんめへゆふなぜへ南へ死ね死なふとのなかでさへかしたものをばとり」（16オ）たがるとやらじやァねへかゆふそれだってよくつもっても見ないまし里の金にはつまるがなれへましてはらァたちなんすな壱分にたらぬはした女郎を買なんすほどなら金のなる木といっては千両とやら万両とやらの鉢うへばかりであらふし出来さへする事」（16ウ）ならぬしの外ぶんはわっちが外ぶんぬしがいひないませずともどふともでございますけれど客人といっちやァぬしのやうなお客ばっかりそふいっちやァおかしくおもひないませふがどれとってためにもならず見なんす通りソレかざらふといふ夜具せへないではねへ」（17オ）かへ南それで九曜の奉公人たァゆふちっとすいさんかね所をがまんでばっかりお茶ァにごしていよふといふものそれにおなみさんなぞがはたらきのあるといふもんだから気ぼねがおれるけれどすべき奉公をしてその上でもお部屋でふそくがましくいったらそこじやァ」（17ウ）おもいれふてねをしてとゞのつまりはくらげへするぶんの事どこのいづくだってくげへをするあぢにかわりはしまいし卅日の卵とやら四角な月とやらはしらぬ事丸い天とうさまはどけへでも出やふではねへかへ南ぐっとさとりをひらきのひらきにかけた帆ばしらへはねやすめのかァ〳〵といふみにたかく」（18オ）とまって気のつゑゝ所と舌のまあるあんべいをつゝしんでおもんみる所が肉桂加入のおだんをくったかたゞしは人参いりの塩からでもなめたといふもんだぜこんやァ客人にやァさっはり口をきかせねへのゆふしれた事わっちが心いきをはなせといひなんすじやァねへかへ南」（18ウ）あんまりはなしすぎてげへぶんがわりいぜゆふどふもそれでも女郎のすゑはよくねへはづでどふこぎつけよふかしれねへわな正じきの事わっち

がよふなもんでもいくら人の身をたおしたかしれめへねへ南金をとつたのもしれやァしめへゆふいまさらけへし所はなし」（19オ）なゝころび八おき目にうかみあがつたら功徳のために神さんへでもおさめよふわな南浅草の八幡さんへかゆふいゝへ南そんならむかで小判で金杉のびしやもんさんへかゆふマアそんなものさ南おきざりにあわねへやうにあしどめの願でもかけるがいゝどふいふりくつかてめへの気めへにやァ」（19ウ）ほれたから南さんにはあんじる事ァねへがゆふわつちもぬしが気のみじけへ所にさ人にやァ添つて見よふもんだねへ南余人にそつて見る事ァゆふヱゝくどいいたしますめへよヲホゝゝゝこんなかんしやくもちのあい手が又あるもんかな南モフ一へんひいきをためして見よふかゆふ〔につこりして〕」（20オ）御ねんのいつたこつたねへアレサくすぐつたいよぬしのきれいずきにはてうどよふざいますけさ行水をはらひやしたよそして気がつまらねへでなにかいつそうれしいねへ〔おりからよそのざしきはさわぎのさいちう〕○〔くら田の女房ばゞァげいしや吉次がこゑにて〕イタコへわるくすれがききてきた羽おりほめりやほんかとうれしがる作者曰うさァねへ」（20ウ）

しつほりの
閨中には

夜半の時雨

遊子　常
遊女　おゆふ

却説おゆふが部屋には居ながしの客常〔トいへる町人にてやぼからぬむすこもつともあまりやすき人がらにあらず床ばしらにもたれて〕爪びきめりやすへ身にかへておもふ人にはとふざかりおもわぬ人のしげ〳〵にくるわのさとのうきつとめ」（21オ）しよふ事もなきあだまくら合〔ひきしまひ三みせんわきへきせるをとりながら〕こふながして居るのもうるさからふのおゆふは〔いま南交をねかしつけて来りしところ也〕きついおせじだねうるさい

のさうるせへといったらけへんないます気かへ常かへるのさ身ども一石じやてといったらそっちのかつ手にやァよからふが一番あたらしくいやがら」（21ウ）れるほどいるねほれられたがふせうだとおもひなせへゆふほんらしいこつたねへ常かんばんにいっわりなしぬしの色がほろ酔の桜ひめだものをさしづめ色男の宗元さんになりてへといふ事さ〔とはいま一人のまわしの客なるべし〕ゆふ髪もないものを色男もいやだのふせうとくきらいな」（22オ）酒をのむのもいやなざしきをまぎれよふばつかりさうぬぼれにあわせている内のつらさ〳〵町とやらの女郎しにでもなったならあのやうな海だか山だかしっつこいくじら汁のなまづぼうずといふ客人へは出もしまいに三田とやら菴室とやらへかへしてしまったら気ぬけが」（22ウ）したよふだね宗元さんたァ見たてないましたねへ常〻坊さま〳〵と名ばかり坊さまころもいやなり女郎衆とねたし実ァおもしろくしげりましたのかゆふかんにんしておくれ常それでもかわいそふにさむからふとおもってよゆふ坊さんのわるい事をするがはやるとねへおもひやりも」（23オ）いゝ頃にしなんしすぎたるはなをおよばざるとかヲホ、、、、こりやァ坊さんのむだ口がうつったのじやァないからあんじないますな常南交さんの口くせかゆふなをいやだねあんなものゝまねをするとひとがわるくなるわな常それでもなにかしらずおもしろさふだねそふういてる中に」（23ウ）やぼらしくゆふなぜ又ふさぎないますへ常うまれ付いてのやぼならしかたがなしじらしてがあるからさゆふそりやァおゆふがくちまねかへ人のおもふやうにもねへどふいふ気だのふ他人がましいからぬしのこゝろがしみ〴〵うらめしいよ常そんならうらめしくねへ」（24オ）所を三べんばかりあるいてけへりに煙草の火でももって来なんしゆふそしていぶしなんすおっもりかへ一言いふと二言目には常一ふくのむと二ふく目にかこんやァでへぶむづかしいなァゆふなにもおまいさんとのなかでむづかしい事はないけれどなんぼっとめの」（24ウ）身だとっても女心のせまい所に二色はあるまいのに其くみわけもないよふにじやけんなしやれはやめないましなトいへども常は〔かまわずねいりかゝるゆへ〕ゆふヲヤどふせふのふ〔となりざしきにて〕うた〻すまの浦辺でしほくむよりもゆふは〔こなたのとこにて三み

せんとりあげじあまりの下の句を小ごゑにて〕〳〵そしてどふすりやぬしのこゝろにすむぞへな」（25オ）常〔ねつきながら〕腕にこつくいがしつかりとありながらなんのこつたなト〔そらふくかぜ〕ゆふそんないやらしい事をした覚はありやせんよ常それじやァなをさらほつてくれろといつてもゆふイ、へぬしの事なら常いま目のめへでさゆふぬしの手でね常ほらせる気かへよしにしなせへゆふなぜへ常」（25ウ）そらほど大せつなうでをまつさおにするもとがにはなるとも見へでもあんめへしめへにやァ和中散見たやうにどれが本家だかしれやすめへとそれがお気の毒だァなゆふそんなら本家も出だなもないよふにもとのしら地がきれいでいゝとかへト〔いつかよういのもぐさをとりだしおもひきつたるありさまにて〕」（26オ）サア消しておくんなんしト〔うでをまくりてつめよるゆへ〕常は〔此とき目をあいて〕〔ぐつとおちつきの〕そりやァマアだがのだへゆふだがのとはよそ〳〵しいよく見ないましなたつたひとつのいれぼくろ名あてはまがわぬ常次郎やいてうたがひはらしなんしなト〔いわれてぎつくりおきかへりながら〕常なにがどふしたとへゆふおまへさんにいゝもせずほりはほつた」（26ウ）なれど折あしく仕まひの事をおねがひ申すしそれゆへしたかとさげすみないますもはづかしいではねへかへぬしがやいておくんなんせずはわつちがやいてしまおふわなト〔たばこをついでいつふくすいその火をもぐさへうつすを〕常〔その手をとりて〕うたげへはれた金でほりものはさしやァしねへがその名の火葬はやめてくんなよゆふ」（27オ）そんならおかしくはおもひなんせんかへ常のろいと人がわらわゞわらへなになんとおもふもんかト〔いふおりしもおもてにきこゆるあんまのこゑ〕常モフ引前だからけへらねばならねへわへゆふ又じらしないますうそばつかり常イ、ヤさつきおぢきが所からよこした手紙のりくつでさゆふそれでも此まゝわかれなんしては気がゝりだァな常」（27ウ）そんならどふでもけへさねへのか女郎しはないて廊下で舌を出しアゝまゝよ辻堂の一夜だとおもつてゆふアレ又あんなそれはおどけ内であんじないませふかねへト〔いひながらじつとみあげていだきつきたがいにおもわず〕口と口常マァこふいつちやァ見たよふなもの内のしゆびをもてめへに見けへてゆふほんざいますかへ常女郎

のうそだ」（28オ）のまことだのとやぼな口から大たんなとやらいつものよふにいひよふにしてくんな〔トはあまりにのろきやうなれどもこゝにいたつては智しやといわるゝたれ〳〵もかくやあるらん〕ゆふそんならときますによト〔手をかけながら〕根も葉もない事にねへト〔すこしはなしとぎれて〕うれしいねへト〔いふこゑきこゆる〕○此時〔となりざしきはよふけのさわぎ〕清吉が〔こゑにて〕ぐにやにでもいたしませふかね〔作者ヲットとなりへさわるぜとはおゆふがおもざしすこしにたればなり〕」（28ウ）うたへ沢辺〳〵の清へおつつけしゆびよふ年があけ手なべさげてもまゝたいても朝寐もしよふよひまどひつねのくぜつのじやれもふうふげんくわとわたしやいわれてみたいわいな

作者曰モシこふされたら奇妙だらふね両人ともにまんざらでもなきとりくみ也

春花秋月両相宜
嗚呼二客之始終如何」（29オ）

後篇　女郎蜘蛛　篇中の文字を其まゝに題す　出来

南穴釣　畢」（29ウ）